パリピなウマ娘とパリピ(偽)トレーナー

勢い任せ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トレセン学園に入るためにに勉強しかしてこなかったトレーナー。

そんなトレーナーは無事トレセン学園に合格するが、自らが勉強しかしてこず、コミュニケーション能力が圧倒的に不足していることに気づいてしまう。

トレーナーは知り合いのウマ娘にナウイ言葉遣いを教えてもらいそれを実践していくのだが失敗続き、そんなトレーナーに声をかけたのは真のパリピ語を操るウマ娘だった。

※ヘリオスの言葉遣いが変かもしれません。

目　次

パリピウマ娘との出会い　1
パーマーとの出会い1　13
パーマーとの出会い2　26
パーマーとの出会い3　39

パリピウマ娘との出会い

中央トレセン学園

一流のウマ娘達を輩出し続ける名門中の名門。

そんなこの国生きるものならば当たり前に知っているほどの知名度の施設。

そんな施設に入れるのはウマ娘の中でも極1部の才能が認められたウマ娘達だけだ。

そして、その選ばれた1人であるダイタクヘリオスは昼休みにふらふらと廊下を歩いていた。

学園に入学したばかりの彼女はまだとてつもない広さを誇る学園を把握しきれておらず、探索という名目で散歩をしていたのだ。

ヘリオスは首をキョロキョロと動かし、黒に青いメッシュが混じった長めの髪を揺らしながら歩いて行く。

「ねぇそこの彼女！君良い脚してるね～。体もチョベリグって感じでいい感じにキマってるし、レースでもいい感じに結果出せそうだよね～。どう？これから俺とお茶でもしながら話しようよ、丁度そこにナウイ感じの食堂があるからさ！」

ヘリオスが人気があまりない外と繋がる通路まで到着した時、そんな声が聞こえた。

トレセン学園ではあまり聞きなれない低い男性の声に思わず足を止める。

声の距離感から自らに向けられた言葉ではないことは分かったが、格式あるトレセン学園では聞きなれない言葉の羅列にどうしても興味をそそられてしまった。

頭に生えた耳が無意識に揺れる。

声の聞こえた方に顔を向けると、そこには1人の男と自分と同じ新入生と思われるウマ娘の姿があった。

「げ……嘘でしょ…」

その姿を見た時、思わずそう呟いた。

男の姿はスーツ姿で、胸にトレセン学園のバッチがあることからト

レーナーであることは分かるのだが、しかし、そのバッチが偽物であることを疑いたくなるくらい怪しい格好だった。
明らかに染められたものである金色の髪は、左右に剃り込みを入れられていて、なおかつ顔には何故かサングラスをかけている。
よく見ればスーツも着崩されていて、胸の部分も開けているのが見えた。
指にはじゃらじゃらという効果音が似合いそうなほどに大量の指輪をつけている。
そんな姿はあまりにも自身が想像するトレーナー像とはかけ離れていて、底抜けに明るく大抵のことは笑って流してしまうヘ彼女であっても思わず後退りしてしまうほどだった。
遠くから見ているだけのヘリオスでもこうなのだ、そんな人物にあんなに近距離で話しかけられているウマ娘本人は恐怖で体を震わせながら、涙目になって腰を抜かしそうになっていた。
話をちゃんと聞けばただトレーナーがウマ娘をスカウトしているというトレセン学園ではよくある構図なのだが、見た目と少し古臭い言葉遣いからか、話しかけられているウマ娘は悪い男にナンパされているような気持ちになっているようだった。
「君も今年入学したばっかりの子だよね～、俺もそうなのよ。だからかなぁ～みんな俺のことアウトオブ眼中っていうか、お呼びでない！って感じでさ、話も碌に聞いてくれないわけ！だからどうか俺のこと助けると思って話だけでも聞いてよ！ザギンのシースーみたいな高いのは無理だけど奢るからさ～」
完全に怯えた様子のウマ娘にも気づかずにトレーナー…と思われる人物は距離を詰めていく。
それにヘリオスは藁をも掴むような切実なものを少しだけ感じたが、話しかけられているウマ娘にとってはそんな様子ですら恐怖を煽るようなものでしかないようで、さらに震えてしまう。
「む…」
絞り出すような小さな声…それはウマ娘が発したはじめての言葉だった。

「む？」
ようやく反応をもらえたトレーナーはウマ娘の言葉をよく聞こうとしたのか耳をウマ娘の方へ向けて傾ける。
言葉が聞けたことが嬉しいのか少しだけ口角が上がっているのがヘリオスには見えた。
「無理ですぅぅぅぅぅぅぅぅぅ!!!!」
恐らくキャパシティを超えてしまったのだろう、絶叫と言っていい大きな声を出しながら、ウマ娘の脚力を存分に活かし、トレーナーとは逆方向にダッシュで走り抜けていくウマ娘。
そんな様子にトレーナーは呆然と見つめることしかできない。
ウマ娘の脚力で全力で逃げられてしまっては、ただの人間であるトレーナーには追いつきようもないし、ここで逃げた相手を追いかけるのは絵面的に不審者でしかない。
そんなことを理解しているのかトレーナーは腕をウマ娘が逃げていった方向へと伸ばし、力なく空中で何かを掴むような動作をしながら固まり、頭を落とした。
そんな姿のまま数秒呆けたように固まったトレーナーは、今度は膝から崩れ落ちて両手を地面につけて分かりやすく絶望しているようなポーズを取る。
そんな様子を見てヘリオスは自分はどうするべきなのかと固まってしまう。
普段テンションの向くままに行動する彼女らしくない長考をし、手を付き震えているトレーナーを見ながら右往左往してしまう。
勧誘したウマ娘に逃げられてしまうトレーナーを可哀想という気持ちもあるし、見た目と話し方の問題だろうという気持ちもある。
そんな複雑な感情の狭間の中で、ヘリオスは引き攣った笑顔を浮かべていた。
そんなヘリオスに、トレーナーのか細い声が聞こえてくる。
「あぁ…もうダメだ。折角トレセン学園のトレーナーになれたのに1人もスカウトできないし…理事長とかたづなさんにもなんか引き攣った笑顔で見られるし…田舎のお袋になんて言えばいいんだ。ト

レセン学園に内定決まってあんなに喜んでくれたのに、1人も担当出来ませんでしたなんて口が裂けても言えない。
あぁもう死のうかな…このまま生き恥晒すよりマシだろうし…」
「ちょちょー・トレーナーさんなーに暗いこと言ってんの！さっきみたいにテンションぶち上げでいこーよ☆」
どんどんと暗い方向へと思考を伸ばすトレーナーを見かねて、ヘリオスは気付くとそう声をかけていた。
客観的に見て関わりたくない人物ではあるのだが、そんな人物にさえも咄嗟に声をかけてしまうのがヘリオスの良い所だ。
さっきのような引き攣った笑顔ではなく、見るものが自然と目を奪われるような溌剌とした笑顔で、両手を胸の前でクロスさせながらポーズを決める。
そんな彼女にトレーナーは初めて気づいたのか顔を上げ、口を鯉のように開けて驚く。
「あぁ、申し訳ない…みっともない所を見せてしまったな。目の前のことに集中しすぎて周りに人がいることに気がつかなかった、これじゃあトレーナー失格だな」
流石に膝をついた状態ではまずいと思ったのか姿勢を正し、立ち上がりながら膝についた泥を払い、トレーナーは申し訳なさそうにそう言った。
スカウト時とは似ても似つかない言葉遣いで、落ち着いた口調になると元々低いであろう声が更に低くなり、少しだけドスが効いたような感じになっていた。
先程の口調は素ではないのだろうか…ヘリオスはそんな疑問を持つが、一旦それは頭の隅に置いて言葉を続ける。
「トレーナーさんマジぴえんってなってるけど一回振られたくらいでめげてちゃダメだよ！確かに逃げられて辛いのは分かりみが深いけどさー、トレーナーさんも見た目エグいからそこはもっとちゃんとしないと！」
「ぴえん…？分かりみ…？慰めてくれてるのは分かるが所々何を言ってるか分からないんだが…」

「ＭＪＫ……トレーナーさんパリピ語分かんないの!?あんなにノリノリで話してたから分かる人だと思ってたのに！」
「え…いや、パリピ語は分かるはずなんだが、トレセンに来る前に知人に教えてもらったし…」
「じゃあフロリダって分かる？別件バウワーは？」
「なんだそれは、全然聞いたことないぞ」
「これも分かんないの!?…というか口調も最初と全然違うし！トレーナーさん偽パリピじゃん！」
偽パリピという言葉にショックを受けたのか、少しだけ元気を取り戻していたはずのトレーナーはまたガックリと肩落とす。
そのまま大きく息を吸い、大きなため息と共に言葉を吐き出す。
「そうか、俺のパリピは所詮偽物だったのか…内定貰ってから必死に勉強して、知り合いに頭下げてまで教えてもらってまで習得したものが偽物だったなんて…滑稽すぎて笑えてくるな」
両手を顔に当てて天を仰ぐトレーナー。
なぜパリピ語を必死に勉強していたかはヘリオスには１ｍｍたりとも理解出来なかったが、彼が相応の努力をして手に入れたであるということはなんとなく分かった。
それが分かるとヘリオスは不憫に思えてしまい、次の瞬間には無意識にトレーナーの手を取っていた。
「トレーナーさん、今から一緒にお茶しよ☆うちで良かったら相談乗るよ～。ここでエンカしたのも何かの縁だし全集中で聞いちゃうよ！」
無意識にそんな誘いをしてしまったのはヘリオスの持つ優しさか、単純にどこかチグハグさを感じさせるトレーナーに関する興味が大きいのか、それはヘリオス自身にも分からなかった。
しかし、いつもテンションに身を任せて行動するヘリオスにとってはそんなことすらどうでもいいことではあった。
ただ自分がそうしたいからそうした、彼女はそんなウマ娘だった。
そんなヘリオスの言葉を聞いて、トレーナーは明らかにテンションが上がっていくのがわかった。

恐らくこれまで断られ続けて碌に話も出来なかったのだろう。そんなことを感じるほど熱が入っていくのをヘリオスは感じていた。
「え、良いのか!?ぜひ頼む!」
そう言いながらヘリオスの両手をキツく握りしめるトレーナーに若干の苦笑いをしながら、ヘリオスはトレーナーの手を引いた。

☆　　☆

「それで、トレーナーは何でそんな格好と言葉遣いしてたの?」
学園に作られたテラスでお茶を飲みながら、ヘリオスはそう言った。
ちなみにテラスにくる前にもお喋りをし、さん付けはしなくても良いと許可を貰っていた。
それは元々敬語が苦手な彼女にとっては有難い申し出だった。
そんな彼女がお茶に口を付け言った第一声の言葉は、ヘリオスが一番気になっていた所だった。トレーナーの話し方はどちらかというと自分と話していたものだというのは何となく分かっていたので、わざわざ無理やり口調を変えている理由がヘリオスには分からなかったのだ。
ヘリオスは両肘をテーブルにかけて手を顎にかけながらトレーナーの発言を促す。
「いや、これはな…色々あって」
言いづらそうにそう話し始めたトレーナーは、ゆっくりとではあるが自分のことを語り始めた。
「元から無愛想なやつだっていう自覚はあったんだ。昔から勉強しかしてこなくて、トレーナーになるために遊びも友達付き合いも全部捨てて努力してきた。
その結果もあってトレーナーの養成学校では常に成績は1番だった。

同期の奴らに無愛想なのを馬鹿にされていたのは知っていたが、結果さえ出し続ければ良いんだと無視してきた。
そうやって勉強を続けてトレセン学園の内定を貰った時、同期の1人にこんなことを言われた。
お前みたいな無愛想なやつをトレーナーにしたがるウマ娘はいない…ってな。
そいつはトレセンに落ちたやつで多分負け惜しみで言ったんだろう、俺はいつものように気にしないつもりだった」
「だった？」
「そう…だったんだが、良く考えてみれば確かにそうかもしれないって思ったんだ。
どんなに勉強して指導力を得たとしてもそれについて来てくれるウマ娘がいなきゃなんの意味もない。
それにもしウマ娘の担当ができたとしてもやる気管理やウマ娘たちの不安を汲み取るためにはウマ娘達との意思疎通が出来なきゃいけない。
今までの俺はトレセン学園に受かるための知識を詰め込むだけで精一杯だったが、実際にウマ娘の担当になるためにはコミュニケーション能力っていうのが欠けていると考えた。
それで知り合いのウマ娘に今の子達が使うナウイ言葉を教えてもらったんだ」
「それであの言葉遣いだったんだ～。んで、その格好は？」
ヘリオスは一旦言葉遣いの件には納得し、ウマ娘を怖がらせている原因の多くを占めているいるであろう格好の説明を求めた。
「格好も同じウマ娘に今流行ってる格好っていうのを色々雑誌で教えてもらった。その子は現役の子達のほとんどが憧れているような子だし、その子に聞けば間違いないと思った」
どうやら彼の格好は一部の偏った意見を聞いた結果のものらしい。
そう思ったヘリオスはなんとかその認識を直すために口を開く。
「トレーナー！その格好じゃぜんっぜんだめだよ☆うちもマジでエグくてドン引きって感じだし～、とりま手についてるの外そっ！」

「え…格好もダメなのか？言葉遣いだけじゃなくて？」
「言葉遣いはウチ的にはありよりのありって感じ～それより格好がなしよりのなしかな☆みんなビビっちゃってると思うし！」
「なるほど…この格好はダメなのか…」
「そそ！スーツもちゃんと着て、サングラスも外そっ！そうすればみんなのバイブスも上がってくると思うよ☆」
　自分の今までしてきたことが間違っていると言われトレーナーは大分ショックを受けたようだったが、これまで1人もスカウトがうまくいっていないという危機感があるのか、ヘリオスの言うことを素直に聞いて指輪とサングラスを外し、スーツもしっかりとボタンを留める。
「お！やっぱりこっちの方がエモくていいじゃん！」
「エモい？良く分からないけど褒めてくれてるんだよな？周りから目つきが悪い言われるんだがどうだろうか、やはりこの年代の女の子から見たら怖くないか？」
　不安そうにトレーナーは言う。
　それに反応してヘリオスはゆっくりと目を細めながらトレーナーの顔の造形を確認する。
　確かに本人が言うようにトレーナーの目は常に何処かを睨んでいるようなそんな印象を受ける。
　恐らく意識していないと下がってしまうのであろうキツく下がった口角と合わさって、お世辞にも話しかけやすい人物ではなかった。
　それを正直に伝えるかヘリオスは迷い、唸り声をあげながら悩む。
　そうしていると当然の如く数秒の間が生まれてしまい、そうなればトレーナーはヘリオスが自身に気を使って言えないのであろうということが容易に想像がついてしまう。
「そうだよな、正直自分でも怖いと思うし…女の子目線だと余計にそうだよなぁ…」
　乾いた笑いを浮かべながらトレーナーは外したサングラスを手持ち無沙汰に弄る。
　それにヘリオスはどうフォローするべきか慌てるが、そんな時ふと

自虐的に笑うトレーナーの口角が上がっている所に目が行く。
細められた目とともに下がった目尻と合わさって、先ほどよりかは怖いという印象は薄れていた。
「ちょー・その顔だよトレーナー！・結構イケてんじゃん！」
「へ？」
「トレーナー！・笑って笑って！・もっと目尻下げて口角バク上げで…ほらこんな風に！」
ヘリオスはそう言うと見本を見せるように自身も目を細め、人差し指を口の端に当てて口角を上げるポーズを取る。
そんな体を張った見本を見せられてはトレーナーも従わざるおえず、ヘリオスの真似をして自信ができる精一杯の笑顔を浮かべる。
「お、いいねぇ！・トレーナーもっとバイブス上げてこう！・思いっきり！」
「え、まだダメか？・それならこれでどうだ!?」
トレーナーはやけになっているのか更に表情を崩す。
そんな風に必死に笑顔をトレーナーを見て、ヘリオスも自然と自身の口角が上がっていくのを感じた。
そして、ヘリオスは必死に自分にどうだと聞いてくるトレーナーを一旦無視し、ポケットからスマホを取り出す。
そして精一杯の笑顔を浮かべるトレーナーにスマホを向ける。
カシャ
そんな音がスマホから鳴った。
「え、今お前写真撮ったのか？・普通に恥ずかしいんだが…」
笑顔を作るのに必死だったトレーナーはヘリオスにスマホを向けられてことすら気付いていなかったようで、呆けたように言った。
笑顔作ることすら忘れ、いつもの怖い顔に戻っている。
「うん☆だって自分で見ないとトレーナーも分かんないっしょ？・トレーナーのサイコーの笑顔撮ったから、自分で見てみてよ」
そう言ってヘリオスはスマホをトレーナーへと向けて写真を見せる。
それをトレーナーはじっと見つめると、信じられないものを見たよ

うに口に手をあてて目を見開く。
「大分マシになってる…笑っただけでこんなに変わるものなのか…」
しみじみと、信じられないというニュアンスも含ませながらそう言うトレーナー。
そんな様子がなんだか可笑しくて、ヘリオスは吹き出すように笑った。
「ぷっ、今まで自分の笑顔見たことないの？」
「あぁ、正直自分の顔は好きじゃなかったし…笑顔の自分なんて想像もしたこともなかった」
「そんなんじゃダメっしょトレーナー！ウマ娘ってのはみんなを笑顔に出来る存在なんだから！それを1番近くで見てるトレーナーもアゲアゲじゃなくっちゃ☆」
ヘリオスはそう言いながら両手を顔の前まで持ってきてピースする。
それを見たトレーナーは顔に手を当てる。
それによって表情は伺うことは出来ないが、震えている肩と僅かに漏れる嗚咽から泣いているのだということが分かった。
トレーナーがなぜ急に泣き出してしまったのかがヘリオスには分からず、混乱しながら慌てて声をかける。
「ちょちょ！なんで泣いてんのトレーナー!?ウチの話聞いてた!?アゲアゲじゃなくちゃダメなんだって！」
「申し訳ない…こんな大事なことをウマ娘に教えてもらうなんて…やっぱり俺はダメなトレーナーだと思ったら自然と涙が…」
「ネガティヴ禁止！テンアゲでうぇーいって感じじゃないと！」
ヘリオスはトレーナーを励ますようにまた声をかける。
ヘリオスは人の泣き顔が好きではない、勿論誰しもそうだとは思うのだが、常に自らが笑顔で周りも笑顔で囲まれているのが好きなヘリオスは余計にそう思うのだ。
片手でトレーナーの肩を叩きながらもう片方の手でピースを作る。
人を励ます時、楽しい時、テンションが上がった時、彼女の手は自然とその形になる。

周りを笑顔にしたいという彼女の、ウマ娘としての本能がそこに現れている。
そんな姿を見て、トレーナーは涙が溢れる目をスーツの裾で拭い、笑顔を作る。
「そうだよな、君のおかげで目が覚めた」
「ヘリオス」
「え？」
「ダイタクヘリオス、それがウチの名前だよトレーナー☆呼ぶときはヘリオスでいいよ！」
君と言われたことに引っかかったのか、ヘリオスは訂正の言葉を挟んだ。
それを聞いたトレーナーは一瞬戸惑ったが、すぐに納得し、言葉を訂正する。
「…ヘリオス本当にありがとう。ヘリオスのおかげでトレーナーとしてもう一度頑張っていく覚悟ができた」
「全然気にしなくていいよ！ウチが好きでやったことだしっ」
「よし！そうと決まれば俺はすぐに笑顔とパリピ語の練習をしてくる！せめてヘリオスの言葉を全部理解出来るくらいにならないと！」
トレーナーはそう言うと勢いよく立ち上がり、立ち去ろうとする。
恐らく目標が決まったことですぐに行動に移したくてしょうがないのだろう、子供のような笑顔を浮かべる姿を見てヘリオスはそう思った。
しかし、このまま行かせてしまうのはヘリオスとしては少し面白くなかった。
折角出来たトレセン学園のトレーナーとの縁なのだ、それをみすみす逃してしまうほどヘリオスも馬鹿ではなかった。
「待ってよトレーナー☆」
トレーナーのスーツの裾を掴み、ヘリオスは止める。
それにトレーナーは不思議そうな顔を浮かべる。何か用があるのか、そんな表情だった。
「パリピ語ならウチが教えてあげる！」

そう宣言をした。
トレセン学園でトレーナーというものがどれだけ貴重であるかヘリオスは知っている。
２０００を超えるウマ娘が在籍するトレセン学園で、トレーナーがそれに見合うだけの数がいるかといえばそうではなく、担当してもらうということがウマ娘にとって最初の試練であると授業では教えてもらっていた。
打算なく彼の話を聞いたというのは彼女の本心ではあるのだが、それはそれ。
真っ直ぐとトレーナーを見つめるヘリオスの笑顔は、少しだけ悪い笑顔だった。
「いいのか!?ヘリオスに教えてもらうのが1番良いというのは思っていたんだが、これ以上君に迷惑をかけるのはいけないと…」
そんな黒い思惑にも気づかずに、トレーナーは嬉しそうな、それでいて申し訳そうなそんな表情を浮かべた。
「ウチもパリピ語分かるいつメン出来たらアゲって感じだし～それにトレーナーのこと心配だしね☆だから、今日からウチがトレーナーのパリピ先生だから！」
そう言いピース姿でバッチリと決めるヘリオスの笑顔は、今日1番のものだった。

パーマーとの出会い1

メジロパーマーというウマ娘は、一言で言えば期待されないウマ娘であった。

パーマーはメジロ家という一族に産まれた。

メジロ家と言えばウマ娘達の中でも一種の憧れのような存在だ。

メジロの名のつくウマ娘達は偉大な結果をレースで出し続け、その血を繋いでいくことでその存在を強固なものとしてきた。

メジロ家に産まれたものは産まれた時から英才教育を受け、最高峰の施設で訓練を行うことが出来る。

ウマ娘という走ることを求める存在にとって、走りだけに集中することが出来るその待遇、そしてそんな中で訓練をし結果を出し続ける存在に憧れを抱かずにはいられない。

しかし、そんな誰もが羨むような境遇がパーマーにとってはそうではなかった。

周りでメジロ家を持て囃すもの達は、メジロ家のものが皆平等な期待を、待遇を受けていると思っている。

だからこそ、周りにいる学校の友達はメジロの名を持つパーマーを羨む。

けれでも現実はそうではない。メジロの名を持つウマ娘達にも格差というものがあり、期待されたものは確かに過保護と言えるほど丁重に扱われ、普段の食事や睡眠時間ですらメジロ家の専属トレーナーが管理している。

逆に期待されないもの達はトレーナーなどつくはずもなく、放任主義と言えば聞こえはいいが、ただ放置するだけのそれをそんな綺麗な言葉では表現出来ない扱いだった。

これだけを聞くと冷たく感じてしまうが、仕方のないことでもある。

ウマ娘を…更に言えばG1レースで勝つようなものを1人育てるというのはとてもお金のかかることであるので、いかにメジロ家といえども全てのものに平等に労力をかけられるわけではない。

1部の期待される、才能のあるウマ娘達に力が集中していくというのは合理的なことだった。
常に結果を残す必要がある。
そんなことはメジロ家に産まれたものにとっては息をすることと同じくらい当たり前のことで、なおかつ絶対的なものだった。
息ができないものが死んでいくように、勝つことが出来ないウマ娘はメジロ家にとって死んでいるも同然な存在だった。
そういう意味で言えばパーマーは死んでいる側のウマ娘と言える。
期待は同世代であるマックイーンとライアンに集まり、彼女は常に蚊帳の外。
メジロ家のトレーナーなど当然つくはずもなく、広大な施設をただ1人走り続ける毎日を繰り返す。
ウマ娘としてレースに出る道を諦めてしまえば楽だったのかもしれない。
ウマ娘としての指導が受けれないだけで、普通に暮らしていく分にはメジロ家は不自由のない場所であったからだ。
走ることをやめ、パーマーが大好きなお花畑の中でのんびりと毎日過ごすという道も悪くはないだろう。
しかし、彼女の中に流れるウマ娘としての血がそれを許さない。
走れるにも関わらず1番を諦めてしまう道を、彼女は選ぶことが出来なかった。
毎日毎日1人で走り続けた。
メジロ家の中で期待されないことは分かっている。
学校でみんなから羨望の眼差し見られるのも、それが自分に向けられたものでなくメジロの名に向けられていることを知っている。
それでも走り続ける。
別にそのことに上等な理由なんてものはない。
自分に期待しないメジロ家のもの達を見返したいとも思っていないし、期待されるマックイーンやライアンに嫉妬があるわけでもない。
ただ走ることが好き。

そんなウマ娘ならば誰もが当たり前に思っていることを、パーマーも当然の様に思っているだけだ。
風を切って走るのが気持ちいい。
移り変わる周りの景色を見ていると、自分だけが特別な世界にいるようで気分がいい。
メジロ家にとっては死んでいるウマ娘かもしれないが、走っている時には誰よりも生きていると感じることが出来る。
そんなことの積み重ねが、パーマーを走りの世界から逃げるという思考をどんどんと消し去っていく。
1人でもいい、期待されなくてもいい、走ることさえ出来ればそれで十分だ。
トレセン学園に入学するまでパーマーは、本気でそう思っていた。

☆

トレセン学園に入学して、パーマーは現実を知った。
トレセン学園では、自身の実力がどの程度の位置にあるのか、それを嫌でも知ることになる。
今までずっと1人で走っていたから分からなかったものが、レースの順位という結果で目に見えるものになるからだ。
そのある意味残酷な世界で、彼女の実力は決して低いものではなかった。
同世代の中で行う模擬レースでは常に上位だったし、選抜レースでも結果を残すことが出来た。
そうなれば当然期待する。
テレビの向こうで見た輝かしいウマ娘達。そんな存在になれるんじゃないかという期待と、そしてもう一つは、自分を見てくれるトレーナーがいるんじゃないかという期待。

メジロ家の中では期待されなかった自分を見つけ出して、憧れの舞台に連れて行ってくれる存在、それがいるんじゃないかと期待した。
メジロの名を持つパーマーじゃない、等身大の自分を見てくれる存在がいるんじゃないかと。
ずっと昔に封じ込めた筈の気持ちが飛び出してきて、選抜レースが終わった後にソワソワと周りを見渡してしまった。
『君、ちょっといいかな』
そんな爆発しそうなほどの気持ちが表に出るように、聞こえてきた言葉に反応した。
遂に自分を見てくれる存在がいた、そんなふうに思ったからだ。
「はい！もしかしてスカウトですか!?」
自分でも信じられないほどの嬉しそうな笑顔をパーマーは浮かべ、しかしその反対で声をかけた筈のトレーナーは引き攣った笑顔を浮かべる。
『え、いやごめん。僕が声かけたのは君の後ろにいる子なんだ…』
申し訳なさそうにそう言うトレーナー。
どうやらパーマーは早とちりをしてしまったらしい。
彼女は恥ずかしさで真っ赤になる顔を見られないように両手を手の前で振りながら笑って誤魔化すと、いたたまれなくなりその場から離れた。
今度はこんな間違いが起きないように周りの子達から距離を取って、なおかつトレーナー達の目に入るような位置で待機する。
話しかけやすいように精一杯の笑顔を浮かべながら、自分に声をかけていると勘違いしたトレーナーに話しかけられている自分よりも順位が低かった子を横目に、泣きそうになる目頭を必死に抑える。
そんなことをしながらパーマーはスカウトを待ち続けたが、結局次のレースが始まっても声はかけられなかった。
全部のレースを見終わってから声をかける子を決めているのかもしれない。
その時の彼女はそう思った。
トレーナーが一度に担当出来る人数は限られているから、序盤に多

くのウマ娘をスカウトしてしまっては後半に出てきたウマ娘が粒揃いだった場合困るだろうし、全てのレースを見終わってから総合的に判断したいというのがトレーナーの気持ちなのだろう。
　そんな理があるようなないような自分に都合の良い妄想をし、パーマーはコース外のトレーナー達からよく見えるような位置に座り込みただただスカウトを待ち続けた。
（1着だったんだし、きっと誰かスカウトしてくれるよね。いつ話しかけられてもいいように姿勢正しくしないと…）
　そんな考えは本当に思っただけなのか、それとも自らを安心するために思ったことなのか、その時の彼女には分からなかった。
　そんな風に彼女が思っているうちにもどんどんとレースは進んでいき、ついには全てのレースが終わってしまった。
　トレーナー達が最後に走った子達の元に駆け寄っていくのを横目に見ながら、パーマーは心の中で訴える。
　自分はここにいる。
　ただそれだけを心の中でずっと叫び続けた。
　口に出していれば喉が枯れ果ててしまうであろうほど繰り返すが、一向にパーマーに声はかからなかった。
　1人、また1人と、トレーナー達は減っていく。
　スカウトに成功したウマ娘と楽しそうに話をしながらゆっくりと学園へと戻っていく姿を見ていると、パーマーの目には自然と涙が溢れていた。
　スカウトされるためには笑顔じゃなければ、そう思い必死に涙を止めようとするが一度流れ出したものを止めることは難しく、せめて泣いている所を見られないように膝に顔を埋めて隠す。
　必死にズボンで拭うが止まることのない涙。
　それがパーマーにとっては、なぜ流れているのか分からなかった。
　期待されないのはいつものことなのに、1人ぼっちなのもいつも通りなのに、走ることさえ出来ればいい筈だったのに。
　そうやって自分を納得させるための考えを必死に浮かべても涙は止まらない。

そんな涙を見てしまうと、パーマーは自分の本心を理解せざるを得なかった。
パーマーは期待していたのだ。
みんなから期待されることを、そしてそれを一心に受ける自分自身の力を。
しかし、現実は1着を取ったのにも関わらずスカウトの1人も来ない。
パーマーよりも順位が低かったウマ娘でさえスカウトを受けているにも関わらずだ。
その理由は分からない、知ろうとする気力すら残っていなかった。
ただ一つ分かることは、パーマーに期待してるものはいないということだけだった。

☆

選抜レースが終わった後、結局パーマーはメジロ家のトレーナーに引き取られることになった。
寮長のフジキセキから渡された手紙から事務的に紹介を受け、書類に自分の名前を書くだけでトレーナーは決まった。
それまでに顔合わせは一度もなく、ただレースに出る時に名前を貸してくれるだけの契約だった。
トレーニングを1人で行い、ただレースに出るだけの生活。
それはメジロ家にいた時と同じ状況で、トレセン学園に来ても変わらない生活にパーマーは呆れて笑ってしまった。
後で風の噂で聞いたのだが、パーマーに名前を貸してくれたトレーナーはライアンの担当らしかった。
それを聞いた時、パーマーは初めて怒りの感情を持った。
今まで当たり前に受け入れてきたもののはずだが、自らの本心を理解してしまったパーマーは、それを受け入れることが出来なかった。

ふざけるな。
人生で初めて心の底から思った。
拳から血が出るほどに強く握りしめ、パーマーは覚悟を決めた。
期待されないのならば期待されるほどの結果を出せばいいだけだ。
ウマ娘の誰もが憧れるＧ１の舞台での勝利。
それを成し遂げれば、みんなパーマーに期待せざるをえない。
選抜レースなんて小さな舞台ではなく、多くの観客が見守るレース場で結果を残す。
誰もが目を離せないほどの眩い光になると、この日パーマーは誓った。

☆

それからパーマーは１人でトレーニング、レース出場を繰り返した。
初勝利に３戦を使ったが、負けた２戦も共に２着と十分に実力を見せる結果だった。
その後のコスモス賞も１着で勝利。
生涯一度も勝てないで引退していくウマ娘も多い中で、着実に結果を出した彼女は確かに才能のあるウマ娘だった。
しかし、それで満足したりはしない。パーマーの目標はあくまでもＧ１での勝利なのだ。
それを成すためには、足りないものが多いとその時のパーマーは思っていた。
その足りないものを埋めるように短期間でのレース出場を繰り返し、その無茶が祟ってか怪我をした。
その時の絶望は忘れられない。

初めて過ごした走れない時間をどうすればいいか分からず、何をするにも上の空だった。
マックイーンやライアンがお見舞いに来てくれたりもしたが、その2人をパーマーはどんな顔で見ればいいのかわからなかった。
明らかに優遇されている2人と、その逆で放置されている自分。
メジロ家にいた時には感じなかった不満を、何故かその時は感じてしまった。
2人が優しいウマ娘であることをパーマーは知っている。
一回だけではあったが、トレーナーの指導が受けられないならばと合同訓練を提案して、一緒にトレーニングをしてくれたこともあった。
それが一回で終わってしまったのは、彼女達とトレーニングをする時に居心地の悪さを感じてしまったからだ。
2人からではなく、他のメジロ家のもの達の何か言いたげな視線に耐えられなくて、1人が好きだからとか適当な理由をつけて2回目からは断った。
そんな経験から、2人がパーマーに優しくしてくれているのは知っているし、メジロ家では仲良く話もしていた。
けれでも病室にお見舞いの品を持ってやってきた2人に、苦笑いを浮かべながらやり過ごすことしか出来なかった。
メジロ家ではどんな会話をしていたんだっけ、どんな風に笑っていたんだっけ、そんなことを思いながら中身のない会話を繰り返した。
そんな風に2人と微妙な距離感を保ちながら病院生活をし、そして退院した。
その後はまたトレーナーに碌に指導すらされない状態でトレーニングをし、自らメンタルを整えて、作戦を立てハイペースでレースに臨む。
そんなことが当たり前に出来るのならばウマ娘にトレーナーがいる理由はなく、当然のようにパーマーは精彩をかいた。
レースに出て、そして負ける。
1人で反省をするのも限界があり、反省点が絞りきれないままト

レーニングを行い、そしてレースに出て負ける。
そんな負のループを永遠と繰り返し、結局また怪我をした。
２度目の怪我にパーマーはどんな感情でいればいいのか分からなかった。
悲しめばいいのか怒ればいいのか…そんなことも分からなくなるほどに荒んだ気持ちは、怪我が治っても治ることはなく、復帰戦では無様に負けた。
その結果にさらに精神を乱された心は、突如現れたトレーナーの一言によってまた乱された。
『パーマー、君は夏のレースの結果次第で障害の方に行ってもらうことになった』
障害レース、それは名前の通り生垣やハードルなどを乗り越えて走っていくレースだ。
そんなレースを勧められて、パーマーの感情はさらに荒れた。
障害も立派なレースではある。
障害レースを誇りを持ってやっているウマ娘達をパーマーは知っているし、それを勧められたからって怒ることはおかしいのかもしれない。
けれど、吐き捨てるようにそれだけを言って去っていくトレーナーは、パーマーが障害に向いているから勧めたわけではきっとない。
ー結果を出せないお前は障害くらいでしか使い物にならないだろう
そんな裏を考えてしまうのはパーマーの考えすぎか、しかしそんなことを考えてしまってもおかしくはない状況ではあった。
腹の奥から込み上げてくる人生で２度目の激情を、パーマーは寮の枕に顔を埋めて吐き出した。
それは誰にも届くことがない、人生初めての絶叫だった。

☆

その後、パーマーはまた同じことを繰り返してた。
トレーニングをしてレースに出る、ただそれだけの作業。
それに以前とは違う所があるとするならば危機感だろうか。
明確に定められたデットライン、少しづつ近づいてくるそれから必死に逃げるようにパーマーはトレーニングを続け、その結果は少しずつ出始めた。
復帰から何戦かは結果は振るわなかったが、夢であるＧ１の舞台にも出ることができた。
天皇賞春。
それはパーマーが初めて踏んだＧ１の芝。
いつも踏んでいるものとはどこか違うようなものを感じて、久々に笑顔が戻ってくるのをパーマーは感じた。
そんないつもと違う面持ちで参加した初Ｇ１は見事なまでの惨敗だった。
いつものように逃げの一手を打ち、途中までは気持ちよく走っていた。
今まで感じたことがないくらい脚が軽くて、どこまででも走って行けそうな気持ちだった。
そんな気持ちが揺らいだのは、突如感じた後ろからの強烈なプレッシャーからだ。
パーマーの首に食らいつかんとする圧倒的な威圧感。
そんな存在を確認するほどの精神力はパーマーにはなく、とにかく気配から逃げようと脚に力を入れたその一瞬、自らの横を通り過ぎていく存在を認識した。
「マックイーン…！」
レース中であるにも関わらず思わずそう呟いてしまったのは、その存在がパーマーにとってとても大きいものであったからだ。
同じメジロ家で育ったウマ娘。
自分と違い期待されたウマ娘。
しかし、そんなマックイーンにパーマーは親近感を感じていた。

マックイーンも確かに大事にされていたが、メジロ家の期待を受けていたのはどちらかといえばライアンの方だった。
優遇されている中でも区分がしっかりとあって、マックイーンはメジロ家の1番ではなかった。
そんなマックイーンに、パーマーは同族意識を少しだけ持っていたのだ。
そんなマックイーンが、パーマーの横を通り過ぎて行く。
前だけを見つめて、その視線はゴールだけを向いている。
パーマーなんて眼中にないような…いや、ようなではなくないんだろう。
1度抜いた逃げウマ娘に差し返されると思うウマ娘はいない。
マックイーンにとってパーマーはすでに乗り越えた壁であって、その壁がもう一度目の前に来ることはない。
そんなことを乗り越えられた壁であるパーマーは分からされて、先程まであれだけ軽かった脚が気付けば沼に嵌ったかのように重い。
遠ざかっていくマックイーンの背中へと無意識に伸ばした手は空を切り、離されていく背中をパーマーはただ絶望しながら見ていた。
マックイーンの背中を見ながら思うのは、納得だった。
G1の舞台で結果を出せるウマ娘。そんな一握りの存在がマックイーンで、それに力を入れて育成をするメジロ家は正しい存在であったのだ。
間違っているのは結果を出せない自分の方で、そんな存在が期待されないのは当たり前のことだった。
そんな納得というか、諦めの気持ちをパーマーは抱えながらゴールした。
結果は13着。
1着を取り観客席へと手を振るマックイーンを横目に見ながら、パーマーは誰よりも早く会場を後にした。

☆

現実を知ったパーマーはその後も走り続けた。
今までのような必死さはなくなり、最低限の練習メニューをこなす。
しかし、結果を出すことは諦めきれないのかレースの頻度は落とすことはなかった。
そんな状態でレースで結果は出ないと思っていたが、何故か結果は出た。
恐らく今までオーバーワーク気味だった分が上手く調整されたのだろう。
熱が入らない分レースでかかってしまうこともなくなって、冷静に戦略を立てられた。
無意識に重なった偶然が勝利を呼び込んだ。
天皇賞春の次のレースでは2着を取り、次のレースは1着。
重賞ではないものの久しぶりの勝利に、パーマーはウイニングライブでセンターを飾ったが、うまく笑えていた自信はなかった。
後に続いたG3でも勝利した。
それはパーマーにとって初めての重賞制覇。しかし、彼女の中に嬉しいという感情はなかった
脳裏にこびりついたマックイーンの姿が離れない。
自分を抜き去っていく時のゴールだけを見る横顔。
勝った後の観客へと手を振る姿。
そんなマックイーンに溢れんばかりの賛辞を送る観客達。
そして、そんなマックイーンから逃げるように去る自分。
それを思い出してしまって、パーマーは喜ぶことができなかった。
頭の中でマックイーンが、ライアンが、重賞制覇如きで喜ぶ自分を馬鹿にしているように感じてしまって。
２人がそんな人物ではないと分かっているはずなのに、メジロ家で自分の手を引いてくれた2人がそんなことするはずがないのに…けれど妄想は止まらなくて。

この日、パーマーはウイニングライブで笑わなかった。

☆

最低限の練習しかしない状況で結果が出続けるわけもなく、パーマーはその後3連敗した。

そして、そんな身が入らないパーマーの気持ちを察知したように、トレーナーから障害行きを告げられた。

拒否しようという気持ちすら沸かず、黙ってそれに従った。

障害のコースを無心で走り、障害を超えていく。

そこで初めて知ったのだが、パーマーは飛び越えが苦手で、何度も柵に足を打ちつけた。

痛めた足にため息を吐きながら練習を繰り返すものの、飛び越えは一向に上手くならない。

やる気も気力もない状態で練習しても上達なんてする筈もなく、不完全な状態のまま挑んだレースでは当然の如く負けた。

怪我のリスクが高い障害でそんな様ではレースに出続けることは流石に許可されず、僅か2戦でパーマーは平場へと戻ってきた。

2度と走れない可能性すらあった平場に戻ってきてもパーマーの気持ちは上の空で、練習にも手がつかなかった。

学園の中庭にある丸太へと腰を下ろし、手持ち無沙汰に足を揺らす。

自分は何をしたいんだろう。そんな自問自答を繰り返し、無駄に日々を過ごすパーマー。

そんなどん底のパーマーが変わったのはあるバカコンビに出会ってからだ。

「君、これから一緒にバイブス上げてかない？」

そんなわけも分からない誘いから、彼女の物語は始まった。

パーマーとの出会い２

声をかけられて顔を上げたパーマーの目の前にいたのは、ニコニコと自分を見つめる金髪の男だった。
パーマーの方に手を出して握手を促すような姿勢を取る男は、トレセン学園の中では有名な男だった。
ダイタクヘリオス。
主にマイルで活躍しているウマ娘で、先日はＧ１であるマイルチャンピオンシップでも１着を取った。
そんな一握りの才能を持つウマ娘の担当が目の前の男だった。
外部では初めて担当を持つトレーナーがＧ１を取るウマ娘に育てあげたことへの話題性で、少しの期間盛り上がっていたが、学園の内部で有名なのはそれではない。
バカコンビ。
それがヘリオスとそのトレーナーを表すときに使われる言葉だ。
いつもニコニコと笑いながら凄まじいテンションでよく分からない言葉を操るヘリオスと、それを映す鏡のようにピッタリと息を合わせるトレーナー。
いつ見ても仲良く無邪気に笑いながら話をする彼らをとてもトレーナーとウマ娘の関係だとは思うことは出来ず、そんな不名誉なあだ名で呼ばれている。
パーマーは彼らのことを時々遠くから伺っていた。
いつもバカ騒ぎを繰り返す彼らを敬遠する声もあるが、２人はそんな声も気にせずいつも楽しそうに笑っている。
お互いが通じあっているのだと分かるその光景がパーマーにとっては眩しく、そして羨ましいものであった。
そんなコンビの片割れが、今パーマーへと声をかけている。
気になっていた存在がいざ近くにくるとどう対応していいのか分からなくて、慣れっこになってしまった困ったような苦笑いを浮かべることしかできなかった。
「あれ、聞こえなかった？今から俺と一緒にバイブスぶち上げに行こ

うって言ったんだけど」
「いや、バイブスとか言われてもよく分かんないし」
「お話ししませんかってこと！そこのナウイ…じゃなかった、ウマスタ映えしそうなカフェでちょっと話そうよ」
「…そうなら最初から分かりやすく言ってくれればいいのに…」
「いやぁーそれはマジでごめん！でももう抜けなくってさー。なんだかんだ評判良いしこのまま突っきっちゃえ的な？まぁそんな感じだから！」
　思わず出てしまった嫌味にもどこ吹く風で、トレーナーはまだニコニコと笑顔を浮かべている。
「それで…これからお茶キメちゃわない？もしかしてこれからテンアゲでぶち上げな練習とか行っちゃう系？それなら一旦帰るけどさ」
「別にいいよ。あたしも丁度暇してたし、それに練習もあんまりやる気なくなっちゃったしね」
「え、そうなんだ。勿体ないなぁ～、札幌記念の走りもヤバかったし、天春も途中までイケイケだったのに」
「あはは…見てくれてたんだ。覚えてくれてる人いると思わなかったなぁ～」
　嫌な所を見られていたな。パーマーはそんな風に思った。
　無様に負けた天皇賞春に、よく分からないまま勝ってしまった札幌記念。
　それは決してパーマーにとっていい思い出ではなく、それを褒められてもどんな顔をしていいのか分からない。
　そんな複雑な感情の中に僅かに照れの気持ちが入ってしまったのは、今までこんな風に面と向かって褒められたことがなかったからであろうか。
　とっくに期待されることは諦めていたはずなのに、いざ褒められると嬉しいと少し思ってしまう、そんな矛盾した感情がパーマーは嫌いだった。
「よし！じゃあ行こっか。勿論奢りだから好きなのじゃんじゃん頼んでいいからね」

そう言いながら笑う男は未だにパーマーへと手を伸ばしており、何となく掴まなければ悪いと思ったパーマーはその手を取った。
パーマーが立ち上げることを補助するように引っ張られた手は予想よりも大きくて、軽薄そうな見た目では想像できないゴツゴツとした手だった。
パーマーが立ち上がったことを確認した男は、手を離し誘導するように前を歩いていく。
ゆっくりとパーマーの歩幅に合わせるように歩きながら、時々すれ違う生徒に挨拶をしつつ目的地へと向かっていく。
かなりの頻度で声をかけられている所を見ると、1部では馬鹿にされているトレーナーだがなんだかんだ評判が良いというのも本当らしかった。
そんなこんなで、あまり人気ない所にこじんまりと作られたカフェに到着した。
「それで、話ってなに？」
席につき注文を終えた所で、パーマーはそう言った。
単刀直入に本題を切り出したのは、目の前の男といることに居心地の悪さを感じたからだ。
なにも考えていなさそうなのほほんとした笑顔は、今のパーマーには少しキツかった。
「まぁまぁ、そう焦らないで。とりま最初は～えーと、ちょい待ってね、鞄の中漁るから」
トレーナーはそう言うとカバンの中を漁り出し、とあるものを取り出す。
「あった！ちょいこれ書いてくれない？」
「これってサイン色紙…？なに、私のサイン欲しいの？」
「そそ。気になる子には貰ってるのよ」
そう言ってパーマーの方へと色紙を差し出すトレーナー。
何を言われるのかと気にしていたパーマーからすれば、肩透かしをくらったような気持ちになってしまう。
色紙を見つめながら、どう対応すべきか考える。

別にサインを書くことに問題はないのだが、目の前の男のいいなりになるのは少し抵抗があった。
悩みなんて何もないとばかりに無邪気な笑顔が癪に障ったからだ。
「ダメ」
少しだけふざけた言い方をしながら断った。
それはこの男を困らせてみたい、そんな悪戯心半分と、自分のサインなんてもらってもしょうがないという自虐がもう半分。
「m.jk…あ、これはマジかの意味ね」
パーマーが最初に分かりやすく喋ってくれと言ったからか、自らそんな説明をしながらへこむトレーナー。
それは頭を抱えるという表現がピッタリな様子で、パーマーが思ったよりもサインが欲しかったらしい。
「ふふ…そんなにへこむ?私のサインなんて貰ってもしょうがないと思うけど」
「いやぁ～サイン貰えるのめっちゃ楽しみにしてたのよ…ねぇ、本当にダメ?わんちゃんもない?」
「別にそこまで嫌ってわけじゃないけど…」
「じゃあ頂戴よ。大事にするから!デコって部屋の1番目立つ所に置くから!あ、デコはデコレーションの意ね」
「デコくらいは流石に分かるって…あと人のサイン勝手にデコんな」
ケラケラと笑いながら話すトレーナーに流されて、パーマーの手にはいつの間にか色紙とペンが握らされていた。
そうなってしまっては断ることも億劫になってしまう。
もとより強い気持ちで断っていたわけでもないので、パーマーは渋々サインを書き始めた。
なんの捻りもない普通のサイン。
出来上がったサイン色紙を見ながらパーマーはそう評価する。
学園に入学してすぐにサインを作った記憶はあるのだが時間が経つにつれて忘れてしまっていた。
そんなサインをトレーナーへと手渡す。
「お、あざまる水産!…これはありがとうの意味ね。うーんなるほど

～」
パーマーへの感謝の言葉を述べた後、トレーナーは受け取ったサインを見ながら何やら唸っている。
「本人の目の前でよくそんなジロジロ見るね…」
パーマーは普通のサインを書いたつもりではあるが、値踏みされるように見られると流石に恥ずかしかった。
しかし、そんな思いから出たパーマーの抗議は届くことはなく、トレーナーはサインとの睨めっこをやめることをしない。
「うん、やっぱり惜しいな」
それが人のサインを見て言うことか、とパーマーは素直に思う。
「惜しいって…そりゃ面白みもない普通のサインだけどさ」
「サインのこともそうだけど、俺が言いたいのは君自身のことね」
「私のこと…？」
その物言いに普通のウマ娘であればイラッとしていただろう。
担当のトレーナーでもないのに、既にデビューして長いウマ娘に惜しいという言葉は普通使わない。
しかし、そんなことを言われてパーマーが感じたのは嬉しさだった。
惜しい…そんなことすらメジロ家では言われなかった。
惜しいというのは目をかけてくれているから生まれる言葉で、期待をしてくれていることの裏返しだとパーマーは思った。
だからこそ、トレーナーがどんな気持ちでその言葉を使ったのかが気になってしまい、疑問符を浮かべた。
「本当だったらもっと人気になれるのになぁって思ってね」
「人気…それってレースで結果残して初めて出るものでしょ？私はこれだけレースに出て重賞1回しか勝ってないのに出るわけないじゃん…」
「まぁ確かに結果を出すのがバイブス上げるには手取り早いけどさ。でもウマ娘を応援するのは強いからだけじゃ絶対ないよ。例えばウチのダイタクヘリオス…って知ってる？」
「知ってるよ」

「ヘリオスが人気なのは確かに強いからもあるけど、それ以上にあの子に魅力があるからなんだ。ほら、これ見てよ」
そう言いながらトレーナーが見せたのはヘリオスのレースの動画だった。
それは逃げウマ娘らしい気持ちのいい大逃げで、同じタイプのパーマーとしてはその実力がよく分かった。
「すごい走り…周りの子達も強い子ばっかりなのに最後まで逃げ切れるなんて」
「まぁ確かにそれもそうなんだけど、俺が言いたいのはこっちね」
トレーナーは見せたい所を強調するようにズームを使いヘリオスをアップにする。
見える所がヘリオスだけになってもさらにズームを続けて、画面にはヘリオスの顔がいっぱいに広がっている。
「ほら、すげぇ笑顔でしょ？息が切れて、足が重くて、プレッシャーにも晒されて、それでもヘリオスは笑顔なんだ。
レースが好きで、走ることが大好きで、そして何より観客が笑っていてくれることが大好きだからこそ走りながら笑うんだ。
そんな彼女だから俺は変われた。
今までの辛気臭い自分を捨て去って、大勢に馬鹿にされたっていいから彼女のためになりたい、そう思った。」
「そう…なんだ」
いつの間にかトレーナーの口調は真面目なものに変わっていて、それに伴い口調も熱くなっていくのをパーマーは感じた。
羨ましい。パーマーは目の間にいるトレーナーに熱く語られるヘリオスに対してそんなことを思う。
そんなに期待されたことが自らにあっただろうか。
メジロ家で生まれてから今までの人生、期待なんて言葉とは正反対の人生だった。
1人で走り、悩み、挫折した。
自身を抜き去っていくマックイーンを見て、才能の差というものを理解したつもりだった。

しかし、目の前で熱量を持って自らの担当するウマ娘を語っている男を見ると、羨ましいと思ってしまう。
自分には関係のないことの筈なのに。
「自分には関係ないって顔してるね」
「え？」
そんなパーマーの感情を分かっているかのように、トレーナーはそう言った。
「俺はね、ヘリオスと同じものを君に感じたんだ。…選抜レースで先頭を走る君は確かに笑ってた。
走ることが楽しくて、1番が気持ちよくて、みんなに見てもらえることが嬉しくて、そんな笑顔だった。
そんな君に俺はヘリオスとチームを組んで欲しいんだ。だから頼む、俺に君のトレーナーをさせて欲しい」
トレーナーは姿勢を正し、頭を下げる。
そんな様子に、パーマーは何が起こっているのか分からなくて混乱した。
今の自分の感情は嬉しいのか、はたまた悲しいのか。
今自分が笑っているのか、泣いているのか。
そんなことすら分からなくて、色々な感情がごちゃ混ぜになるが、それでも悪い気はしなかった。
確かにトレーナーはヘリオスのことを語る時と同じ熱量で、パーマーのことを勧誘している。それが分かったからだ。
この人なら自分が欲しかったものをくれる気がする、そんな直感がパーマーにはあって、だからこそパーマーの返答はすぐに決まった。
「…ありがとうトレーナー。急すぎて何がなんなのか分かんないし、自分がどんな感情なのかすら分からないけど、あなたが本気なんだってことは分かるよ。
私が今まで喉から手が出るほど欲しかった期待を、あなたはくれるんだと思う」
「……」
パーマーの言葉をトレーナーは頭を下げたまま無言で聞いていた。

話していると少しだけ冷静になったパーマーは、トレーナーが握る手が僅かに震えているのに気がつく。
それを見て僅かに笑みを浮かべる。
この人は本気なんだ。そんなことを再確認できたような気がして、だからこそパーマーもそれに本気で応えなければいけない。
「だからこそごめんなさい。私はあなたのチームには入れない」
ハッキリと、真っ直ぐに眼に力を込めて言った。
そうしなければ途中で折れてしまうような気がした。
「……理由を聞いてもいいかな？」
信じられない。穏やかに努めているトレーナーの声からそんな想いをパーマーは感じ取った。
「私ね、もう気づいちゃってるんだ。自分は期待をかけられる程の才能がないんだって、期待をかけられてもそれに応えられないんだって…それをもう知っちゃったから。
期待されないのも辛いけど、折角期待してくれた人に失望されるのは、きっともっと辛いよ」
「そんなことは絶対ない、俺が君に失望することなんてありえない。」
「はは…ありがとね。でもやっぱりダメだ。トレーナーはそんなことしないんだって思っても私怖いんだ。トレーナーの期待は、重すぎて私には背負いきれそうにないから」
「君は勘違いしてるよ。君は立派な「トレーナー」
更にフォローを入れてくれようとしていたトレーナーを制して、パーマーは発言する。
「私選抜レースの時、誰もいなくなったレース場でずっと待ってたよ。門限ギリギリまで、1人で座ってずっと待ってた。
…それでも誰も声をかけてくれなくて、思えばその時にすでに自分の才能の限界に気づいちゃってたんだよね」
「それは君が悪かったわけじゃない！あれには理由が…」
「もういいよトレーナー。とにかく、私は今まで通り1人で頑張るから」
これ以上トレーナーの言葉を聞いているのがつらくて、パーマーは

立ち上がった。
そそくさと荷物を纏めて、スカートについた埃を手で払う。
パーマーをトレーナーへと背を向けて、歩き出す。
「じゃあねトレーナー。……できることなら、あなたとはもっと早く会いたかったよ」
そう言って去っていくパーマーは、一度も後ろを振り返ることはなかった。
その背中は何処か晴れやかで、そんな後ろ姿にトレーナーは声をかけれなかった。

☆

「……はぁ」
カフェに1人取り残されたトレーナーは、冷めてしまった紅茶を見ながら溜め息を吐いた。
カップの中に映るトレーナーはいつもの貼り付けた笑顔ではなく、学園に入った当初の見るものを威圧する顔だった。
「危なっ、笑顔じゃないといけないよなぁ～。スマイルじゃないと参る…これ今度カイチョー様に教えてあげよ」
いつもの調子に戻るために強制的に元気を出させる。そのために出したダジャレの出来に、自画自賛する様に笑った。
「ふふっ、中々にいいセンスだね新人君」
そんなダジャレに釣られてか、この学園では聞き馴染みの深いそんな声が聞こえた。
トレーナーがその声が聞こえた方に振り向くと、やはりそこにいたのはこの学園の生徒会長であるシンボリルドルフ。
そしてもう1人、そんな彼女に付き従うように歩く厳格な女性がい

た。
「おっ、カイチョー様がこんな所にいるなんてレアだなぁ。それにグルーヴも一緒なんてテンアゲだね！」
「貴様が私をグルーヴと呼ぶな！」
　自らの名前に略されたことに怒ったのか、エアグルーヴはいつも吊り上げている目を更に上げて、問い詰めるように睨みつけながらトレーナーを叱る。
「まぁエアグルーヴ、今はそう怒らないであげてくれ。新人君は振られて落ち込んでいる所だからね」
「げっ…カイチョー様に見られてたのか。めちゃハズいじゃん、というかもしかしなくてもグルーヴにも見られてたよなぁ～。うわぁー、顔あちぃ」
「ふん、貴様のその軽薄な言葉遣いがいけないのだ。最後のように初めから真面目に話していればいいものを」
　見られていた。その事実に恥ずかしくなって顔を抑えるトレーナーに、追撃をする様にエアグルーヴのナイフのような言葉が刺さる。
　それにトレーナーはうっ…と心臓を抑える仕草をする。
「大体さっさと本題を話さずサインなど貰いおって…真面目にしようとすれば出来るくせにわざとふざける所が私は好かんのだ」
「まぁ落ちつけエアグルーヴ。彼だってもう学園の殆どの人間には普通に話した方が受けが良いことくらい分かっているさ。
　それでも話し方を変えないのはたった1人の担当のため…そう思うと中々可愛いと思わないかい？」
「えーと……それでカイチョー様は俺になんかようなの？」
「話を逸らすか…それもいいだろう。何、私はただ新人君を慰めにきただけさ。君は色々言われてはいるが優秀なトレーナーの1人には間違いないからね、こんな所で腐ってしまってはトレセン学園の損失になってしまう」
　そう言い胸を張るルドルフは流石の貫禄だった。
　彼女自身生徒会長という肩書きを持ってはいるが、その実はただの

1生徒。
しかし、そんなことをカケラも感じさせない佇まいは、7冠という前人未到の領域にいるウマ娘だということをまざまざと感じさせられる。
そんなルドルフの貫禄に内心押されながらも、表面ではそれを見せないようにトレーナーは笑う。
「やだなぁ、こんな所で腐るわけないっしょ？ネバギブよネバギブ！…あれ？ネバギブは新しい方の言葉遣いでいいんだよな…？」
「ふふっ、また彼女と話してきたのかい新人君。君のそういう分かりやすい所は私は好きだよ。
…まぁ、それは置いておいて、結局君はどうする気なんだい？彼女のスカウトをまだ続けるかい？」
「もちろんロン！何回もエンカしてアタックするよ。俺のバイブスはまだ全然伝えきれてないんだから」
自信満々に笑うトレーナーにルドルフはやれやれと頭を手で押さえながら横に振った。
腕の間から僅かに見えるルドルフの口元は、僅かに上がっていた。
しかし、そんなルドルフとは対照的にエアグルーヴは剣呑な雰囲気を保ったままだった。
「貴様、分かっているのか？メジロパーマーには既に担当がついている。この学園のトレーナーならば知っているだろうが、あのメジロ家のトレーナーだ。それが分からない貴様ではあるまい」
「…そりゃ知ってるよ。けどなんとかなるっしょ」
「貴様…！どこまでもふざけているな！それでなんとかならなかったから貴様も選抜レースで彼女に声をかけなかった、違うか!?」
「…そうだね」
「それが何故今なら大丈夫になる!?理由を話せ！話さないのならメジロパーマーのスカウトは私が許可しない！」
声を荒げるエアグルーヴ。
しかし、その声は何処か悲しげで怒っているというよりも叫んでいるようだった。

エアグルーヴは知っている。
生徒会というトレセン学園という組織の中心に近い人物だからこそ、この学園が様々な権力の荒波の中にあるということを。
ウマ娘に血統があるように、トレーナーにも血統がある。
パーマーがメジロ家で相手にされなかったように、今エアグルーブの目の前にいる男もトレセン学園の中では小さすぎる力しかないハエ同然の存在だ。
それを知っていて男を怒るエアグルーブは、口調では分かりづらいが心優しいウマ娘の1人だった。
そんな優しさが分かるからこそ、トレーナーは頭をかきながら困ったように笑った。
「バカコンビ、俺とヘリオスはそんな風に呼ばれてる」
「…それがどうした。今の話になんの関係がある？」
「俺はね、それは違うと思うのよ。コンビっていうのは対等なものじゃなきゃいけない。けど、トレーナーはあくまでもウマ娘を支えるためにあって、対等に競い合える存在じゃない。
…つまり、ウマ娘と対等な存在は同じウマ娘でしかありえないんだ。
ダイタクヘリオスはダイイチルビーというライバルを得て限界を超えた。
だからこそ、次はメジロパーマーという仲間が彼女、いや、お互いにとって絶対に必要なんだ」
「…本気なんだな？」
はぁ…と女帝と呼ばれる彼女らしからぬ溜め息を吐きながら、諦めたようにトレーナーを見つめた。
真っ直ぐと彼女を見つめる目を見てしまうと、エアグルーヴは何も言えなくなってしまう。
それは彼女のトレーナーが時々見せる目と同じで、そんな目をした男が自らの言う通りにならないことを彼女は知っていた。
「当たり前田のクラッカー」
「…おい」

「冗談だって…。まぁ見ててよ、いつか新聞が彼女達で一杯になる日が来るから」
そう言うとトレーナーは立ち上がった。
別れの挨拶をし、手を振りながら去っていくトレーナー。
そんな姿を、２人は違った表情で見つめていた。
１人は笑いながら。もう１人は、不機嫌そうな表情だった。

パーマーとの出会い3

トレーナーからのスカウトがあってからのパーマーの生活は特に変化はなかった。
学園で授業を受けてから1人で練習をする。そんな変わらぬルーティンを繰り返していた。
先日のスカウトを無かったことのようにしてそんな日々を繰り返しているのは、これ以上自分の気持ちが揺れ動くことを防ぐためだった。
勝手に期待して、裏切られて、そんなことを繰り返しているとだんだんと心が疲れてきてしまう。
何も考えずに過ごす日々こそが、今の彼女には何よりあっていた。
そんな思いでいつものように授業終わりに練習をしようと下駄箱へと近づくと、ある男が見えた。
「げっ」
思わずそんなことを言ってしまったのはパーマーのせいではないだろう。
下駄箱の前のベンチに座り、パソコンで何やら打ち込んでいる金髪の男、それは先日パーマーをスカウトしようと近づいてきた男であり、ここ最近パーマーの心を揺さぶる筆頭である人物だ。
スカウトを断った日以降、件の男は行く先の至る所に現れ、話をしようとしてくる。
授業の間の休み時間、昼休み、そして登下校。
ありとあらゆる隙間時間に現れては、笑顔で呼び止めてくる。
規則があるのでクラスの中までは入ってこないが、それでも少しでも油断して外に出ようものなら問答無用で現れる。
「おっ、今日も爆速だね。これから練習？それなら良い練習場見つけたんだけど一緒にど？」
今日も今日とていつものようにそんなフランクな挨拶をして、トレーナーは手を振る。
そんなトレーナーへの対応は、いつも決まっている。

「私は1人で充分だから」
それだけを言って横を走り抜けていく。
そうしてしまえばただの人間であるトレーナーは追いつくことが出来ない。
後ろから呼びかける声に聞こえないふりをして、パーマーはグラウンドまで一気に走り抜けた。
「はぁ…これでもう一週間。すぐに諦めてくれると思ったのにな…」
グラウンドにつき、蹄鉄の確認をしながらそう呟いた。
一週間。それが長いか短いかは人によるだろうが、ひとりのウマ娘をスカウトし続ける期間としては長いだろうとパーマーは思った。
皇帝や帝王ならいざ知らず、デビューして未だ無名と言っていい彼女に付き纏うにしては果てしない時間だ。
そんなにも自分に価値があるのだろうか。そう自問自答する。
「私にそんな価値は、ない…よね。何で分かってくれないんだろう」
分からない、とにかくパーマーには分からないのだ。
自分の価値も自分の気持ちも。
「もう話しかけないでって言えば諦めてくれるかな」
きっともう話しかけるなと真正面から言えば流石にトレーナーも諦めるだろう。
直接言わなくても、たづなさん辺りに言えば強制的に止めてくれる筈だ。
そんな簡単な方法は既に思いついていて、しかし実行できないでいた。
正直言ってしまえば、パーマーは嬉しいのだ。
自分に話しかけてくれることも、期待してくれることも、その一つ一つが嬉しくてたまらない。
これが入学直後だったなら喜んでその手を取っていた。
トレーナーに言われるがままに夢を見て、そして現実を知って打ちのめされただろう。
今その手を取れないのは、既に現実を理解しているからだ。
夢を見た後の答えを、パーマーはもう知っている。

学園に入学して数年、そのたかが数年は、1人の少女を大人にするには十分な時間だった。
「よし、走るか」
一通りの準備を終えて、走り出す。
ゆっくりと歩くような速度から、段々と人間基準では考えられない速度にまで上げていく。
現実を知って尚止まらない両足は、何のために回るのか。
それは、彼女自身にすら分からなかった。

☆

午前の授業が終わると、トレセン学園は騒がしくなる。
授業が終わったことによる開放感は、いかに中央の格式ある学園として変わらずあるもので、授業中は凛々しくノートを取っていたウマ娘達も、昼休みにはただの少女に戻る。
「パーマー、ご飯食べよ～」
「うん、オッケー。ちょっと待ってね」
パーマーは同級生であるウマ娘にそう声をかけられて、明るい声で返した。
机に広がった教科書を片付けて、準備を整える。
「よし、準備完了。食堂行こっか」
そう言い立ち上がると早足で教室の扉の前まで移動して、顔だけを出して周囲を確認する。
「今日はいない…」
「またトレーナーさんいないか確認してるのー？いい加減スカウト受

けちゃえばいいのに」
何度も廊下前で声をかけられた所を見られたせいで、クラスではパーマーがスカウトにあっていることは周知の事実となっている。
だからこそ、こんな風に言われることも何度かあった。
「あははー。まぁこっちにも色々事情があってさ」
笑いながらパーマーが濁すと、それ以上の追求はされなかった。
ここのクラスの者たちは既にトレセン学園に身を置いて長い。
だからこそ、それぞれが悩みを持って日々過ごしていることを知っている。
才能の差だったり、怪我の有無、そういった所で悩みは尽きず、だからこそお互いが踏み越えてはいけないラインというものを自覚している。
そんな距離感を弁えた友人にありがたさを感じながら、トレーナーがいないことを確認したパーマーはホッと胸を下ろしながら食堂へと足を運ぼうとする。
「パーマー、少しお時間よろしいですか？」
「ひっ！」
油断した所でのその呼び声に、思わず悲鳴を漏らした。
その後、声をかけられた方へと視線を向ける。
「なんだ、マックイーンか。驚かせないでよー」
そこにいたのはメジロマックイーン。
腕を組みながらも凛々しい佇まいを崩さず、パーマーをじっと見つめていた。
「驚かせたつもりはありませんが…パーマーは気が抜けすぎですわ」
「そうかなー、ごめんごめん。それで何か用？」
「……用がなければ話かけてはいけませんか？」
「え、いや、そうじゃないけど…」
急に悲しげな表情でそう言うマックイーンに、パーマーはどう対応するべきか困った。
トレセン学園に入って以降避け気味になってしまっている負い目もあって、彼女をどうすれば悲しませずにすむか色々と考え、右往左

往する。
　そんなパーマーの様子を数秒見つめていたマックイーンは堪えきれなくなったようで、吹き出して笑う。
「ぷっ、冗談ですわよ。少しだけパーマーを困らせてみたかっただけです」
「…！もう意地悪しないでよ～。本気で焦ったじゃん！」
「ふふ、この間私が誘ったお茶会を断った腹いせですわ。折角ドーベルとライアンも来てくれましたのに」
「…それは申し訳なかったけどさ～」
　マックイーンは、悪巧みが成功していつもは中々見せない上機嫌な笑顔を浮かべる。
　そんな様子を見ていると、パーマーは少しだけ胸が痛くなった。
　マックイーンはいつだってパーマーに優しくて、怪我をした時も本気で心配してくれた。
　そんな彼女の誘いを断ってしまうのは、紛れもなく自分の心の弱さだった。
「…それでパーマー。これから私とお茶をしませんか？」
　そんな唐突な誘い。
　何事だろうか、そうパーマーは思う。
　マックイーンは急な誘いを中々してこない。
　相手の予定を確認し、段取りを組んで、そして入念に準備を行う。特にメジロ家同士で集まる時などはそれが顕著で、当日の誘いはかなり珍しい。
　だからこそ、この誘いの裏を読んでしまう。
　もしかしてメジロ家から何か言われたのだろうか…そんなことを考えてしまって、気付けば口が動いてしまう。
「いや～、私今から友達と食堂行くからさ。また今度でいい？」
　少し早口になりながらも断りを入れ、足早に立ち去ろうと試みる。
　踵を返し食堂の方へと体を向けたパーマー。
　しかし、それは後ろから急に手を掴まれたことで止まる。
「パーマー、お願いです」

ただ一点を鋭く見つめる二つの目に、思わず気をされた。
穏やかな声色とは正反対の力強さで、握る手にも力が篭っていた。
これはダメだ。
そんなことを直感的に思った。
逃げ出そうとも天まで追いかけてきそうなほどの迫力で、逃げられないと本能的に感じた。
「分かったよ。話そうマックイーン」
真っ直ぐにマックイーンの目を見返しながらそう言ったのは、せめてもの抵抗だった。

☆

一緒に食堂に行くはずだった友人に断りを入れ、２人はカフェにやってきた。
それは奇しくもトレーナーに誘われて行った場所と同じで、妙な既視感をパーマーは感じた。
閑散としたカフェで優雅に紅茶を飲むマックイーンはとても絵になっていて、こういった所に自分との違いをパーマーは感じてしまう。
レースに出て結果を出すことを前提とした、メジロ家のものとして相応しい佇まい。
それは注目される機会すらないだろうと思われているパーマーには無いもので、羨ましいと素直に思う。
もっとも自分に優雅な佇まいが似合うかと言われたら違うのだろうが。
そんなことを思いながら、まずは何気ない会話が繰り返された。
今日の天気から始まって、体調について、そして怪我の後遺症が出

ていないかの確認。
そんな明日には忘れてしまうであろう何でもない会話が数ターン。
「…スカウトを受けているらしいですね」
マックイーンもいつ本題を切り出すか考えていたのだろう、話の間に僅かに生まれた間に投げ込まれたのは、そんな直球の豪速球だった。
「…うん」
心の準備もできておらず、思わず肯定の言葉だけを返した。
「何でもここ一週間ずっとその人から逃げているらしいとか。私の耳にも入ってきましたわ」
「う…そんなに噂広がってるんだ…」
「ええ、ゴールドシップが大笑いしながら話してましたから。どこまで広がっているかは私には想像できませんわ」
「あちゃー。1番伝わっちゃいけない子に伝わっちゃったかー」
自分の思わない所で広がり続けている噂に苦笑いをしながら、パーマーは首に手を当ててさすった。
「それで、貴方の気持ちはどうなんですか？嫌だから逃げているならはっきりとそう言わないと伝わりませんわよ」
そこを聞かれると痛い。
嫌だから逃げているのならば、確かにマックイーンの言うようにそれを直接伝えなければいけない。
それをしないのはパーマーの中で嬉しいという感情があるからで、でも手を取ることもできなくて。
そんな中途半端な気持ちの結果が、今の逃げ続けるだけの無駄な時間だ。
そんな時間がお互いにとって良くないというのは、勿論分かっている。
自分が抱え込んでいたそんな気持ちを、マックイーンに正直に吐露した。
「…もういい加減はっきりさせるべきだよね」
自分の気持ちを全てマックイーンに吐き出して、最後にそう結論づ

けた。
決意を持って宣言した言葉は、彼女にはどう映るのか。
呆れているだろうか、それとも決意したことを褒めてくれるだろうか、そんなことが気になって、パーマーは恐る恐る顔色を窺った。
そんな気持ちで見たマックイーンの顔は予想になかったポカンとした顔だった。
「何故もう決めてしまう必要があるんですか？」
予想外の返答に頭が掻き乱された。
悩みすぎだと言われることも想像していた中で、それとは正反対の言葉に脳の処理が追いつかなかった。
「え!?だってこんな状況になってるのは私のわがままのせいだし。トレーナーにも迷惑かけちゃってるし！」
焦って捲し立てた言葉に、マックイーンは笑った。
「ふふっ、わがまま…ですか。良いではありませんかわがまま。貴方はずっと我慢してきたのですから、1ヶ月、いや半年くらいのそれは許容するのがトレーナー、いや、男性の漢気というものでしょう？」
「でも、そんなに時間かけちゃったらもうトレーナーは待ってくれないよ。現に今日は一度も会ってないし…もう私のことは諦めちゃったのかも…」
「彼もそんな浅い覚悟で貴方をスカウトなんてしてませんわ。現にほら、今日突然押しかけられて貴方に渡すように頼まれましたの。自分じゃ受け取って貰えないからと」
そう言いマックイーンが取り出したのは何の変哲もないノートだった。
「え、まさか直接話せないからノートでってこと!?え、どうしよう、見て良いのかなぁ…でも見ちゃったら決意が揺らいじゃう…」
「私にはその決意は既に大分揺らいでいるように見えますけどね。…まぁそれは置いておくとして、多分そういうものじゃありませんわ。彼、貴方と直接話すことに拘っているみたいですから。それにノートの表紙を見てください」
そう言いノートを見やすいように掲げるマックイーン。

そのノートのタイトルはあまりにも信じられないもので、思わず二度見をしてしまった。
「え、なにこれ。……パリピ語辞典？私にはこの意味が全く分からないんだけど…」
ちなみに、副題として下に小さくナウイトレーナーになるためにと書いてある。
そんなものを見せられてどう反応すればいいのか、パーマーには正解が分からなかった。
「私にもこのノートの意味は分かりかねますが、絶対に読んで欲しいと彼は言っていましたわ。……まぁ、とりあえず言えることは彼は長い時間をかけて貴方をスカウトする覚悟があるということではないですか？」
「うーん、これってそうなるのかなぁ…」
「さぁ？」
「さぁ…!?何で急に自信なくなっちゃうんだよマックイーン！」
「私、彼とは今日初めて会ったばかりですし何を考えているかなんて分かりませんわ。どうせ深く考えても分からないなら都合の良い方に捉えても良いではありませんか」
「…なんかそれっぽいこと言ってるけど要は考えるの面倒臭いだけじゃない!?」
「ふふ、冗談ですわ」
「分かりづらいし、キツい冗談だよそれ！」
会話でマックイーンに振り回されて、しかしパーマーは笑っていた。
あんなに気まずかったはずなのに、いざ話してみると会話は弾んで、昔のように冗談で笑顔が溢れる。
それがなんだか懐かしく感じた。
「今日の私は彼に色々と振り回されましたから、そのお返しですわ」
「えぇ…トレーナーなにしたの？初対面なのに振り回すってどういうこと…？」
「ノートの件に始まって、他にも色々とお願いをされました。初対面

ですのに図々しいことこの上ないですわ」
「そうなんだ…なんかごめん…」
「その代わりとして駅前のスイーツバイキングの無料券を貰ったので、今回は多めに見ますわ。今は減量中なので行けませんが…」
「重ね重ね申し訳ない…」
バイキングの無料券は確かにマックイーンの嗜好にあったものだが、減量中にそれを渡すのは流石にタイミングが悪い。
引き攣った顔で無料券を受け取るマックイーンを想像しながら、深く頭を下げた。
冷静に考えれば何故パーマーが謝る必要があるのか分からないが、とりあえず細かいことを抜きにして頭を下げた方が良い時もある。
それが分かるくらいには、パーマーは大人だった。
パーマーの謝罪を受けて、マックイーンは笑みを深めた。
「そろそろ時間ですわね」
マックイーンは立ち上がりながらそう言う。
時計の針は大分回ってしまっていて、これから昼食を取ることを考えるとあまり時間があるとは言えなかった。
「もうそんな時間か、ノート届けてくれてありがとねマックイーン」
それを見てパーマーも慌てて立ち上がり、お礼を言う。
「お気になさらず。貴方にとって良い方向に向かってくれることを、私も願っていますから」
胸を張り堂々とした態度でそう言うマックイーンに、敵わないなと自然に思った。

☆

「むむぅー」
トレセン学園の中庭に何故か佇む小さいテント。
完全に外の光を遮断して蝋燭の光のみが灯る中で、水晶と睨めっこをしながら唸るのはマチカネフクキタル。
ウマ娘としての顔と占い師の顔を使い分ける彼女。今は完全に後者だった。
「それでずっと悩んでるんだけどさー。マックイーンは悩んで良いって言ったけどやっぱりそろそろ答えを出さなきゃいけないと思うんだよね…」
マックイーンとの会話から数日経ち、パリピ語辞典を粗方読み終えたパーマーは未だに迷っていた。
感情で言えば手を取りたい。しかし、理性ではそこに救いがないことを知っている。
理性と感情の全く5分な攻めぎあい。
それがどれだけ拮抗しているかは、占いに頼ってしまっている現実が顕著に表していた。
「救いはないのですか～？」
パーマーの言葉を聞き終えたフクキタルがさらに水晶を睨む目を強める姿を、後ろに控えるメイショウドトウが心配そうに見ながらそう言った。
フクキタルのアシスタントである彼女には、水晶の中に何かが見えているのだろうか。そんな疑問をパーマーは持った。
「パートナー！パートナーの存在が…不可欠！」
全て見えた。
そんなことが窺える強い言葉は、パーマーを驚かせた。
「それってやっぱりスカウト受けた方が良いってこと!?」
「救いはあるんですか～？」
「否！それは分かりませんっ！」
「えー!?」
パートナーと言えば今のパーマーにはトレーナーのことしか浮かばず、そう言ったパーマーにすかさず否定するフクキタル。

突然梯子を外されたパーマーは、思わず肩を落とした。
「出会いは今日です！今日の出会いを大切にしてくださいっ！」
それだけを断言し、もう全て話し終えたと言わんばかりのドヤ顔をするフクキタル。
「ちょっと～、聞きたかったことと違うよー！」
そんなフクキタルに若干イラッとしながら、パーマーはごねる。
「見えたものは以上です！もうこれ以上は見えません！」
「救いはないんですか～？」
もう見えないとはっきりと言われてしまってはどうしようもない。
元々占いで全てを決める訳でもないのでパーマーは渋々納得し、テントを出る。
外に出るとテントの中との光の差が激しく、自然と目を細めた。
少しでも参考になればと占いに手を出してみたが、結局は何も分からずじまいだった。
パーマーは懐からノートを取り出しペラペラとめくりながら、今後のことを考える。
「パートナー…トレーナー以外だと誰がいるのかな？もしかしてマックイーンとか…ってそんな訳ないか」
マックイーンと隣で競い合う姿を想像して、これはないなとすぐに思った。
パーマーの記憶にあるマックイーンはいつも遠くにいて、とても競いあえる仲間だとは思えなかった。
その後も色々と心当たりのある人物を探っていくがどれもピンとこず、結局は占いの結果を気にしすぎる方が馬鹿らしいかと結論づけた。
フクキタルの占いは1部では有名だが、当然１００％当たるものという保証がある訳でもない。
「うわぁあああ、もう終わりだぁ…ウチの運命は終わったんだぁぁぁ、もう世界なんてどうにでもなってしまえばいいんだぁぁぁ！」
色々と考えを巡らせていたパーマーに聞こえたそんな声。
声の方を見ると、何か見覚えのあるウマ娘が中庭に植えられた大き

な切株に想いをぶつけていた。
この切株にレースでの悔しさをぶつけるウマ娘は多くいるが、太陽もまだ高い時間からここまで怨念が篭った言葉を吐き出すウマ娘はパーマーは聞いたことがなかった。
一瞬頭の中でパートナー、出会い、と先程の占い結果が頭によぎるが、こんな出会いはあまりにもと思いすぐに頭を振って掻き消した。
どうするべきだろうか。
パーマー自身の問題すら解決できていないのに、今彼女に声をかけるのは正しい行動なのか、そんな風に思い悩む。
しかし、そんな風に悩んだのは一瞬だった。
思い出すのはこれまでのこと。
声をかけて欲しい時に声をかけて貰えない辛さを、もうパーマーは知っている。
そして何より、声をかけて貰えた時の嬉しさを知った。
それだけ分かっていれば、どうするべきかは自ずと出てくる。
無意識に手を差し出して、笑顔を作る。

「どしたん？悩みあるなら聞くよ？」